

## 第二十六話 生きるに値するいのち

昔、キリストがユデアで福音を述べ伝えていたときの、ある日のことです。キリストに反感をもっていたファリサイの輩や町の長老たちが騒々しく、ざわめきながら、キリストを取り囲みました。その時、うつむいて地面になにか字を書いていたキリストは、なにごとだろうと立ち上がりましたが、その立ち上がったキリストの足下にドサッと投げ出されたものがありました。見ると、それは、髪を振り乱し、恥かしさに面をおおって泣きくずれるひとりの女でありました。人々は、その女を指さしながら、口々にキリストに向かって申しました。「この女は姦通の現場をつかまったのだ。モイゼの法律によると、こういうみだらな女は、その場で石殺しの刑に処せよ、とあるが、ラビはこれをどうさばくのか？」と。

キリストは、静かに答えました。

「モイゼが、そう命じているなら従わねばならぬ。石を投げうつがよい。」

人々は、キリストのこの言葉にちょっと、戸惑ったようでしたが、次の瞬間には、ワツと歓声

をあげ、手に手に石を取ってこの女を打ち殺そうと身構えました。そのとたんです。キリストのりんとした声が、人々の耳を……いや、人々の心を打ちのめしました。

「待て！ 他人の罪をさばくものは、自分自身が罪を犯してはならぬ。未だかつて神のみ前に罪を犯した覚えのないものがあるなら、そのものがまず石を投げるがよい。」

人々は、アツと声をのみました。キリストの言葉は気負い立った人々の心の奥底で、まさに晴天の霹靂のように鳴り轟いたのです。キリストとひとりの女とを取りまく群衆は、手にした石をそっと地面におくと、ひとりまたひとりと、その場を立ち去って行ったという事です。

これは聖書に現われたキリストの姿の一コマですが、神の掟にそむいて、おのが身を動物の欲情に供し、その汚れと恥に、よよと泣き伏すひとりの女も、その女を罪人とさばいて石をもって打ち殺そうとする群衆も、神のみ前にすべては罪人なのでした。だが、それはまた、そのままに、私たち自身の姿でもあるのではないのでしょうか？ 未だかつて、神のみ前に罪を犯した覚えのないものが、果たして世の中にひとりでもおりまじょうか？

もちろん、こういうとき、罪という言葉の意味が正しく理解されねばなりません。そしてそれが、警察のごやっかいになるという意味でないことはいうまでもありません。人間の終局の目的である永遠の生命に行き着くために定められた人の道、すなわち、人間が、かくあらねばならぬ

と定められた神の掟が描き出す素晴らしい理想的人間像を打ち砕く行いは、すべて、道ならぬ業となるのです。

他人から恩を受けながら、それに報いようとせぬ忘恩と裏切り、……自分の悪業を棚に上げて他人の小さな過失に憤る憤怒や傲慢、憎しみと恨み、……また他人の成功や幸福には心悲しみ、他人の不幸には心の中で思わず凱歌をあげるねたみ心、……正しい限度を越えての暴飲と暴食、……あるいは、性の衝動にかられて、動物的な欲情におのが身体を汚す邪淫など、心と言葉と行いともって、神の掟にそむく私たちの姿は、たとえ、それが世間一般の通例ではあったにしても、私たちのあるべき道義的人間像を破壊し、魂の生命をむしばむのです。むしばまれた魂には、カラリと晴れて澄み切った日本晴のような充実感、およそ縁の遠いものですね。

なあに、だれだって、そうなんだ……と自分自身に言い聞かせながらも、ちょうど長い間、風呂に入らぬ垢じみた不快感に似たものが、激のように魂の底にこびりついて……ああ、もしも、あの純潔だった少年時代から、も一度出直すことができるものなら……それができないとしても、せめて、身も心もきれいさっぱり洗い浄めることでもできるなら……とは、自分自身に反省することを知っている、真剣な生命を生きようと望むすべての人の心からの願いではないでしょうか？

だが、しかし、たとえ、過去の生命のしみがことごとく洗い浄められたと仮定しても、もしも、私というものが、今と全く同様に意志の弱い、情欲にひかれやすい、みじめな存在にすぎないのだとすると、新たに出生した新しい生命のすがすがしい喜びもつかのまのこと、また、たちまち罪の汚れにそむことになりましょう。

ですから、満ち足りた生命を生きるということは、私がおのが弱さによって陥った過去の汚れが、すべて洗い浄められると同時に、再び同じあやまちに陥らないために私の弱さが強められ、私の無知が照らされ、私のみじめさが高められることでなければなりません。

ここで私たちは三度、神に目をあげます。第一には、人間創造の目的を問うための神の啓示を仰いだ私たち、そして次に、その目的に行き着くための安全な道として、神の掟を受け取った私たちは、今、ここに三度目、私の弱さが強められ、私のみじめさが高められるために、神の御力を乞い願うのです。

真の宗教とは、神の啓示による徹底した人生観を人類に伝え、そこへ導く道として、永遠不変の道徳のいしづえを人類に与え、そして、弱い人類がその道を登り行くために必要な力を惜しみなく与えるもの……そうです、そういうものをこそ、私たちは真の宗教と呼ぶのです。

「神は愛にて在す」とは、キリスト教の主張するところです。そして、キリストは、神の愛をは

てしなき許しの愛と説きました。おのが罪を憎み、なんとかしてその罪の償いはたしたいとの熱意と、再び同じ罪を繰り返すまいとのまごころをもって、神のみ前におのが罪を悔いるなら、殺人も、姦通も、強盗も、神のみ前に許されない罪はないとキリストは説きました。私たちが過去の魂の汚れを憎む真剣な情熱をもって、神のみ前にぬかずくなら、神は、私たちの魂を、その限りない愛の中に、しっかりと抱き包み給い、ちょうど醜い鉄の一片が鎔鉱炉の炎の中で真赤に灼熱されて、火となるように、私たちの魂も、おのが過去の欠点や罪や過失もろとも、神の愛の中に浄化され、灼熱され、美しい光を放って燃え立つ一片の炎と化するという、キリスト教でいう神の恩寵の生命を信ずることが出来るなら……いや、これは事実なのです。信じなければならぬことなのです。昔、長崎に二十六人のキリシタンが邪宗を信ずる者として、十字架に磔にされて処刑されたことがありますが、その中に、数人のまだいたいけな少年がいたことをご存じでしょうか？ その中でも、クリスチャン・ネームをルドヴィコという十三才になる少年は、時の長崎奉行が、「もしおまえが、おまえの信ずる神を捨てると誓うなら、私はおまえを待分に仕立ててやるうではないか。」とすすめる甘言と誘惑を退け、神を捨ててこの世にんの喜びがありません。か、りりしく言い放ち、毅然として処刑されて行ったのですが、そのわずか十三才の少年の驚嘆すべき勇氣は、いったいどこから出たのでしょうか。また近くは、蟻の街のマリ

アと称えられた北原怜子という可憐な一少女の、大学教授の娘という安逸を投げうって、パタ屋部落に入り込み、ついに、それら見捨てられた人々のしあわせのための人柱となったという、あのけなげな強さは、なにを物語っているでしょう。それこそ、神の恩寵に生きる魂の、高さと強さとの、生きた証明ではないでしょうか？

信仰のもたらす魂の強さは、……自分の生命を喜んで投げ出し得る魂のけなげさは、神が、自分の行いを、自分の生命を喜んで嘉し受け給うとの動かすことのできない信念から湧き出て来るのです。そして、また、神が愛し給うというこの信念は、自分の過去の汚れが洗い浄められ、清浄なこの魂の中に神の恩寵が満ちあふれているとの燃え立つような確信から、ほとばしり出て来るものなのです。

皆様、おこがましいかもしれませんが、私は、取るに足らぬ小さな、虚無にも似た小さな存在ではありませんが、神が私を愛していられると心の底から確信しています。神は私を愛し給い、私の生命の一瞬一瞬を、愛のままざしで見つめ給う……これは私がこの世に生きる限り、私のあらゆる行いの、いわば原動力なのであります。だが、そう申しながらも、私はこの言葉を、高ぶった気持ち、おこった気持ちで言っているのでは決してありません。私が神の愛を信ずるのは、私が自分の罪深さを意識するからですし、その私の数え切れないほどの罪の上に与えられた神のみ

あい、いがみあう疑心暗鬼の世界でした。

神を愛するということは、さきほども申しましたように、私自身の罪が許されたという感動から湧き出ることです。そして、真剣におのが罪深さを意識するとき、私たちは他人をさばくことはできなくなります。自分が許されるためには、自分もまた、許さねばならぬ、ということはきわめて当然なことなのです。私は一番最初のお話のとき、愛するとは許すこと、忍ぶこと、忘れることだと申しました。神の愛を信じ、神の愛に生きるとき私たちは、その時始めて、ほんとうの意味で、許しあい、忍びあい、愛しあうことができるのです。

私はまた、しあわせは、満ち足りた魂の生命だと申しました。魂の持つ、二つの精神的な能力、知恵は真理を、意志は善を追求します。つまり、知恵は知りたいたい、意志は愛したいという欲求です。そして、知恵が、神の存在と、それに伴う人間終局の目的を知り、意志が、限りなき善と美なる神を愛し、神を愛するがゆえに、人間同志互いに、高い愛情をもって、愛しあうとき、人間の魂は満ち足りるのです。その時、六尺に足らぬ小さな存在でありながら、この世のなにもものをもつてしても満たされ得なかった人間の魂が、ついに無限なるものによって満ちあふれるのです。

私は、カトリックの教えを信じたなら、病気がなおるとも申しませぬし、貧しい人々がお金持ちになるとも申しませぬ。けれども、深い理解をもって、キリストの教えを受け取り、神の愛の

許しを確信するからです。

さて、私たちが神の愛を信ずるとき、当然なことですが、私たちもまた、神を愛しまつることを誓うのです。神を愛しまつるとは、神の意に従い、神の掟を守って、道義的な美しい人間像を自分の中に築き上げたいとの悲願であります。

神の掟を守って……と申しましたが、神の掟の中で最も大きいものは、いや、むしろ、神の掟のすべてを一つにしぼり上げたものは、キリストの言葉を引用いたしますと、それは「おのが心の限り、力の限り神を愛しまつること、神を愛しまつるがゆえにおのが隣人をおのれのごとくに愛すること」なのです。

皆様、私はこの『心の花束』の一番最初の話を「愛するということ」についての話から始めたことをご記憶でしょうか。そして、私はきょう、私の最後の話を、再び「愛すること」で結びたいと思います。

近代ヒューマニズムは、神への愛を忘れて、ただ人間同志愛し合うことを、すなわち博愛主義をその理想としてかかげました。けれども神の愛に基礎づけられない人間愛は根のない草のようなもの、それがしおれ、枯れ果てるために、そう長い年月は必要ではなかったのです。近代思想としての博愛主義は枯れ落ちました。そして残ったものは、メッキのはげた人間の野性、つかみ

中に憩うとき、貧しい人々は、人間らしい生活を営むための手段としての富を追求しながらも、今現に貧しくあるという、その貧しさの重荷を満ち足りた心になう勇氣を見い出すでしょう。富める人々は、人間らしい生活を営み得る以上の有り余った財産に対する誤った執着に打ち克ち、それを貧しい人々に分け与えることの喜びを悟るでしょう。そして、いつの日にか、憎しみや戦いによるのではなく、愛と自由に基づいた平等な世界が実現するでしょう。

病める人々は、その病苦によって浄化され高められて、人間の終局の目的に一步一步近づきつつある自分の姿に満ち足りて、病苦に耐える力を持つでしょう。

恋人同志は、神の力に支えられて欲情に負けず、神の愛に基づく美しい未来の家庭の設計を語りあうことでしょうし、夫と妻とは、永遠を目指す人生の旅路のよき伴侶であろうと誓うことでしょう。

こうして、私たち全人類が、唯一の神を父と仰ぐ神の子ら、血を分けた兄弟姉妹なのだ悟って、互いに、いたわりあい、助けあい、愛しあって、この世の生命を生きるとき、ああ、私は声を大にして絶叫したいのです。

『この世の生命は、喜びであり、感謝であり、魂はち切れるばかりの満ち足りた生命なのだ！』と。

皆様、私たちの生命はなんと生きるに値する生命ではないでしょうか。

皆様、ちょうど半年にわたり、ラジオを通じてお近づきになりました皆様とも、お別れする日が参りました。この半年の間、私の拙い話を耳を傾けてくださいました皆様に、心から、厚くお礼を申し上げます。仙台市の荘司様、宮城県大河原の松本様、押野様を始め、遠く福島、岩手、青森の各地からも、心のこもったおびただしい激励のお便りをいただきました。ぜひぜひ、いつまでも続けるようにとの暖かな言葉もありましたが、いろいろな都合で、一応『心の花束』第一集として、打ち切らせていただき、半年のお休みをいただいて、さらに私自身、思索を深め、修養をつんで、次の七月から再び『心の花束』第二集として、皆様とご一緒に過ごす時間を持つことにさせていただきますと存じます。

なお、カトリック教会の教理について、もっと詳細に知ってみたいとお望みの方、またさらに進んで、カトリックによる信仰生活を生きてみたいとお望みの方は、ご遠慮なく、もよりのカトリック教会に、おいでになって直接、教会の神父たちとお話し合いになってください。では、も一度、聴取者の皆様に心からお礼を申し上げてお別れいたします。

皆様、どうぞ、いつまでも心にしあわせの灯をともし、お元気でお待ちしております。

では、さようなら。